

【批評記事】 支部横断企画 「バンバン！ケンバン♪はままつ」

小西 潤子 (西日本支部)

2012年10月20日(土)、21日(日)の2日間にわたって開催された「バンバン！ケンバン♪はままつ」は、静岡文化芸術大学室内楽演奏会2012として企画された「キーボードと出会うコンサートとフォーラム」のイベントである。同大学内の講堂や講義室、ギャラリーのみならず、タイアップした浜松市楽器博物館、浜松市民映画館シネマイーラ、ヤマハミュージック東海浜松店音楽ホール、アクトタワー内特設会場と浜松市内中心地にある施設で、複数の演目を同時多発的に開催するという大胆な試みである。しかも、小岩信治・同文化政策学部准教授監修のもとで、イベント名の発案から企画、出演者や関連企業等への交渉、広報、チケットの販売から当日の運営まで、学生たちがすべて手作りで行ったというから、驚異的である。楽器製造の街・浜松ならではの鍵盤楽器をテーマに、その過去、現在、未来をテーマに、ユニークな音楽活動を行っているプロたちの多彩な演奏、音楽学、マネジメント、製作技術者などの専門家による講演、シンポジウムが贅沢に展開された。

対象とされた鍵盤楽器には、ピアノやチェンバロ、リードオルガン、電子オルガンといったお馴染みの楽器はもちろん、鍵盤ハーモニカ、アコーディオン、ハーディ・ガーディ、さらには親指ピアノやガムランなど東南アジアの打鍵楽器が含まれ、テルミンやオンド・マルトノのように演奏者の少ない楽器の生演奏までが行われた。晴天にも恵まれ、浜松市民をはじめ遠方からの専門家を含む子どもから年配者まで、訪れた方々それぞれが楽しめる内容であった。静岡大学の学生も、「どの演奏会もクオリティが非常に高く、どれもテーマに沿っていた」「コンサートの種類が豊富」「出演者と交流できる」「無料のものもあった」「普段聴けない珍しい楽器の演奏があった」と感想を述べていた。

東西の学会員は、専門的な立場からシンポジウムのパネリストとして貢献し、支部横断企画としても適切なイベントであった。たとえば、シンポジウム「大正琴の文化史」に参加した知人は、「日本独自のものだと思っていた大正琴が台湾、バリ、インドに伝播し、それぞれの生活や文化に溶け込んでいるのを知って驚いた」と述べていたように、それぞれの内容は充実していた。運営についても、「物品販売などでも徹底していた」など絶賛の声が聞かれ、私自身もやさしく声掛けして会場まで案内してくれた学生スタッフの対応に感心した。

しかし、すばらしいイベントであったがゆえ、残念に思われたところがなかったわけではない。まず、それぞれの会場が少し離れているため、10分ほどの合間での移動は難しかったことである。特定の演奏を目指して来たならともかく、博物館の来場者のうち「さらに静岡文化芸術大学に足を延ばしてみよう」とその場で思った方は限られていたであろう。逆にいえば、博物館の公演だけでもかなり充実していたのである。それがゆえ、その演目が「バンバン！ケンバン♪はままつ」の一環と位置づけられているのに気づけなかった例も多かったであろう。また、時間帯にもよったであろうが、駅前に設置された「バンバン！ケンバン♪はままつ」案内所のスタッフが、「プロムナード・コンサート」に群がっ

た人々を静岡文化芸術大学まで誘導するのは、なかなか厳しかったろうと思った。

学内での演奏に関しては、なるべく多くに参加できるように複数回の公演が用意されていたが、公演・シンポジウムを選ぶと全部を見ることはできなかった。公式ガイドブックの「おすすめコース」からも2コマ枠のシンポジウムがはずされていることから、これは想定内のことだったのであろう。しかし、結果として公演・シンポジウムへの来場者数に影響した。内容の面白さと比すれば、シンポジウム「大正琴の文化史」、講演「浜松のピアノ産業調査」の参加者数の場合、それぞれ20人程度であったのはもったいなく思われた。しかも、参加者の大半が関係者と思われる中年層であり、学生の姿はほとんど見られなかった。後になっていえることだが、案内係などで会場外に配置されていた学生の人数を減らして、聴講者として参加できる機会を増やせばよかったと思った。また、人的配置が手厚かった反面、会場案内の掲示が少なかったため、私はあやうく同時開催されていた大学入試模擬試験会場に入りかけてしまった。

また、学生主体とはいえ、関係教員も準備に追われたことが想像される。そのせいもあってか、シンポジウム「鍵盤楽器のこれから」では、打ち合わせが徹底していない感を受けた。特に後半からは、2人の司会者がパネリストの発言を制御できない状態になり、「鍵盤楽器」というテーマの枠を超え、「コンピュータとインターネット時代における音楽社会とその未来像」へと論点が移行してしまった。それはそれで興味深い議論ではあったが、パネリスト間のやりとりに対して聴講している側が冷や冷やする場面もあった。シンポジウムとしては、バランスのとれたパネリストの人選をし、それぞれの役割を明確化しておくべきだったという印象を受けた。

だが、これらの課題を差し引いても、「バンバン！ケンバン♪はままつ」という果敢な試みは、大成功だったといえよう。多くの来場者が楽しみ、それぞれが鍵盤楽器の新たな一面を発見し、鍵盤楽器の街・浜松の文化的アイデンティティを五感で感じ取ったはずである。また、静岡文化芸術大学で文化政策を学ぶ学生のみなさんにとっては、まさに生きた学習の場となり、この経験が将来の糧として生かされることは間違いない。

最後に、小岩准教授と学生スタッフの皆さんへのお礼の意味を込めて、私的な事情を述べることをお許し願いたい。本イベント内容を具体的に知ったのは、夏休みも終わろうとしていた同年9月24日のことであった。私は静岡大学の学生24人を引率して、浜松各地の音楽関係施設を巡る「ゼミ遠足」の最終目的地として静岡文化芸術大学を訪問し、小岩准教授に「楽器の街・はままつ」に関するレクチャーをしていただいた。また、「学生同士の交流の場も設けてほしい」というリクエストをし、それに応えて、学生スタッフの方たちが本イベント企画内容を紹介してくれたのであった。私は、チラシを見ただけでクラクラッと目が回りそうになり、大多忙の中を呑気に大勢で押しかけたことを大変申し訳なく思った。だが、その成果もあって、静岡大学の学生の何人かが今回のイベントに足を運び、大層刺激を受けることになった。静岡県内の大学間交流と学生のまなびの場を提供してくださったことに対して、この場をお借りして感謝の意を表したい。